



## 目標と指導と評価の一体化

# 「育成したい6つの資質・能力」を意識した 指導と評価で、生徒の主体性を育む

### 徳島県立名西高校

1分  
で分かる軌跡

徳島県立名西高校は、普通科の入学生員数が削減されたことをきっかけに、教育の質の維持・向上を目的とした学校改革に着手した。校内で議論を重ね、生徒の実態を把握した上で、「育成したい6つの資質・能力」を設定。各教科でパフォーマンス課題とルーブリックを作成し、6つの資質・能力を育成すべく、授業改善に取り組んでいる。ルーブリックの運用が軌道に乗った後も、目標と指導と評価の一体化に向けて、校内研修などを通じた不断の改善を図っている。

#目標と指導と評価の一体化  
#ルーブリックの実践的な運用

#### 学校概要

設立 1923（大正12）年  
形態 全日制・定時制／普通科、芸術科／共学  
生徒数（全日制） 1学年約100人  
2022年度卒業生進路実績（全日制）  
国公立大は、徳島大、鳴門教育大、高知大、愛知県立芸術大、京都市立芸術大、島根県立大、尾道市立大、広島市立大、高知工科大に9人が合格。私立大は、大東文化大、女子美術大、京都女子大、同志社女子大、大阪音楽大、近畿大などに延べ66人が合格。



校長  
向井佳子  
むかい・よしこ  
同校に赴任して2年目。



企画課長  
多田和也  
ただ・かずや  
同校に赴任して11年目。数学科。



進路指導課長  
横田浩一  
よこた・こういち  
同校に赴任して6年目。地理歴史科。



企画課、人権教育主事  
三浦真美  
みつら・まみ  
同校に赴任して3年目。国語科。



企画課国際交流担当  
田中由子  
たなか・ゆきこ  
同校に赴任して1年目。教務課。英語科。



企画課探究学習担当、1学年主任  
近藤幸絵  
こんどう・さちえ  
同校に赴任して6年目。教務課。地理歴史科。

## 変革の背景

### 入学定員数の削減を機に、 自校の教育のあり方を見直す

2023年度に創立100周年を迎えた徳島県立名西高校は、普通科と県内で唯一の芸術科を設置している。同校が学校改革に着手したのは17年度のこと。そのきっかけは、18年度から普通科の入学定員数が115人から75人に削減されたことだった。生徒数の減少に伴い、教師数も削減される中で、いかに教育の質を維持・向上させていくかという課題に直面した。そこで、有志の教師による「今後のことを考える会」を設置し、自校の教育のあり方について語り合った。

当初は、当時行っていたきめ細かい指導を継続しようと、限られた教師数で習熟度別クラスを実現する方法などを検討した。しかし次第に、これからの社会で求められる力は何か、それを生徒が身につけるためにはどのような指導をすればよいかという議論になっていった。その過程

で、徳島県教育委員会「カリキュラム・マネジメント・ハイスクール事業」に応募。19・20年度の同事業の研究指定校に採択され、まずはブランドデザインの策定に着手した。

## 変革の一手①

### 様々な教師が参加する会で 生徒像や今後の課題を議論

19年度、同事業を推進する組織として、「名西高校魅力化プロジェクトチーム」（以下、MMP）を立ち上げた。チームの運営の中心を担う

数人の教師以外はメンバーを固定せず、誰もが自由に参加できる組織にした。そして、MMPでの議論の結果を職員会議で報告し、承認を得るという形で取り組みを進めていった。企画課長の多田和也先生は、次のように振り返る。

「本校では、口頭から授業や生徒のことなどを率直に語り合う関係性が教師間でできています。『総合的な探究の時間』の検討などにおいて、教師同士で生徒の課題やあり方を出し合い（図1）、MMPでは、それらを踏まえて育成を目指す資質・能力などを議論しました」

図1

### 目標設定に向けた現状把握

【前略】計画の作成にあたっては、本校の実態に即した本校なりの目標が必要です。その目標をはっきりさせるために、先生方のご協力をいただきたいと思えます。時間割の黒板に模造紙を掲示し、3色の付せんを置いています。次の3つについて感じることを、色分けして付せんに記入し、模造紙に貼ってください。

- ①青：生徒はまあまあできていると思われること。
- ②ピンク：生徒はあまりできていないと思われること。
- ③黄色：生徒にこうなってほしいと望むこと。こんなふう成長させたいと考えること。

※同じようなものがあったら貼ってください。同じものがたくさんあるのは大事なことです。※付せんが増えてきたら、同じようなものをグループにするなど、先生方で自由に貼り替えてください。



※学校資料を基に編集部で作成。

MMPには毎回入れ替わりで多くの教師が参加し、活発に意見を交わした。そうして19年度末に、「明日に輝く名高生」を教育方針に掲げ、育てる生徒の育成」を教育方針に掲げ、育成を目指す資質・能力として「継続する力」「探究する力」「伝える力」「協働する力」「創造する力」「つなげる力」の6つを掲げたブランドデザインを策定した。進路指導課長の横田浩一先生は、こう振り返る。

「議論を通じて、本校の生徒は真面目で素直だが、主体性や積極性に欠けるという課題を教師間で共有できました。多くの生徒が、社会的なことへの関心の幅が狭く、社会と結びつけて自分のあり方・生き方を考えられていないと感じていました。その点を変えたいと思いました」

## 資質・能力を評価するため、全教科でルーブリックを作成

先進校の視察や外部研修会への参加を重ねる中で、目標として掲げた6つの資質・能力を生徒に育むことができていくかどうかの検証は、従来のペーパーテストだけでは難し

く、パフォーマンス課題による評価が欠かせないと考えるようになった。そこで20年度に、大学教員を講師に招き、パフォーマンス課題と評価をテーマにした全教師対象の校内研修を実施。各教科がパフォーマンス課題とルーブリックの作成に着手した。

「年数回実施するパフォーマンス課題の評価基準として活用する予定だったルーブリックですが、日々の授業における資質・能力の到達度を測る指標としても用いることができると考えました。そこで21年度から、ルーブリックを用いた学習評価を行うとともに、ルーブリックで設定した評価基準に基づいた授業設計をすることにしました」（多田先生）

## 変革の一手②

### 伸ばす力のカードを黒板に貼り、目標を生徒と共有

しかし、21年度の授業改善は、停滞状態に陥った。企画課の近藤幸絵先生は、次のように振り返る。「ルーブリックを完成させたもの

の、それに基づいてどんな授業をすればよいか、多くの教師がイメージを持っていませんでした。結局、21年度は、ルーブリックをほとんど活用できないまま終わりました」

そこで22年度は、「育成したい6つの資質・能力」を書き込んだ6枚のマグネットカードを全クラス分用意し、教師が授業の開始時や途中に、本時で育成を目指す資質・能力のカードを黒板に貼るようにした（写真）。そして、「今日の授業で伸ばしたいのは『つなげる力』と『創造する力』だからね」などと生徒に伝える、生徒が目標を意識して授業を受けるようになることを目指した。

「その小さな工夫が、大きな成果につながりました。毎授業、生徒にカードを示すようにすることで、教師は必ず、『今回の授業では、6つの資質・能力のうち、何を伸ばすか』、『そのために授業をどう組み立てるか』といったことを意識します。カードがあることで、ルーブリックで設定した評価基準に基づいた授業とはどのような授業なのかを考え、それを実践できるようになりました」（近藤先生）

カードが示されるようになってから、生徒の授業態度に変化が見られた。例えば、「江戸幕府が長期政権を築けた理由」をテーマとし、「探究する力」を伸ばすことを目指した日本史の授業では、生徒は教師から提示された資料などを基に、他の幕府と江戸幕府との違いを比較しながら、その理由を自分なりに考えようとする姿勢が見られたという。

「カードを通じて授業の目標が示されたことで、生徒は自分がこの授業で何を学び、そのために何をやるかが考えられるようになるなど、主体性の高まりを感じます」（近藤先生）



写真 「育成したい6つの資質・能力」の中から、教師がその授業で育成したい力のカードを黒板に貼り、生徒に示している。

図2 「育成したい6つの資質・能力」のルーブリック 国語科の例

重点的に育成したい資質・能力		レベル1 (C)	レベル4 (S)	授業や学習の場面や形態、判断する方法等	観点
目標達成度		1年生	3年生		
設定の目安		教師の支援を受けながら、目標に向けた習得に努める。	自ら課題を発見して、目標到達ができる。		
継続する力	基礎的な言語能力 (語彙力)	基本的な語彙を身につけようとしている。漢字検定3級の常用漢字を、文や文章の中で読んだり、書いたりすることができる。	言語に対して特徴的な語句の量を増やし、それらの文化的背景について理解を深めるとともに、語彙を豊かにしている。	漢字の読み書きができ、言葉の文化的背景を理解している。(漢字検定の受験、授業中の漢字テストの成績)	1
探究する力	言葉を通して他者や社会にかかわり、自己と向き合う力	教師の支援を受けながら、人間、社会、自然などに関する文章の内容から興味のあるものを見つけようとする。	人間、社会、自然などに関する文章の内容や解釈から、異なる価値観と結びつけて新たな観点をもち、行動できる。	評論などを読み、自分の考えをワークシートに書いたり、発表できたりする。(関連する新聞記事を選べる、図書室で図書が選べる)	3

右端の「観点」は2023年度につけ加えた。「1：知識・技能」、「2：思考・判断・表現」、「3：主体的に学習に取り組む態度」となる。  
※学校資料を基に編集部で作成。

## ルーブリックの活用を通じて 評価基準の改善を模索

23年度は、ルーブリックの効果的な運用をテーマとした校内研修を1学期に2回実施した。企画課の三浦真美先生は、「校内研修は、ループ

リックで定めた基準を見直す機会にもなった」と語る。

「担当教科の国語科では、『継続する力』を語彙力で評価することにしていました。しかし、生徒の名前を挙げながら科内で議論するうちに、『継続する力』のレベルを語彙力のみで規定することとは適当ではないという考えに至り、評価基準を改善することにしました」

23年度からは、年度初めと学期末に、各教科のルーブリックを用いて生徒が自分の資質・能力を自己評価することにした。

企画課の田中由子先生は次のように語る。  
「生徒は自己評価しづらそうでした。それは、

ルーブリックの文言がまだ抽象的だからではないかと感じました。そこで、評価基準のそれぞれのレベルが、どの場面でも何ができるようになることを、さらに具体的に示そうと考えています」

## 変革の成果と展望

### ルーブリックによる評価と 観点別評価の整合性を図る

22年度は観点別学習状況の評価(以下、観点別評価)にも取り組んだが、ルーブリックによる評価と観点別評価との整合性をどう図るかが課題となった。そこで23年7月の校内研修では、教科ごとに、「育成したい6つの資質・能力」を、いつ、どのように評価するか、それぞれの力が3観点のどれにあてはまるかを話し合い、ルーブリックに加えた(図2)。その改善により、ルーブリックによる評価を観点別評価に用いることができるようになる。多田先生は、「今後運用しながら、ルーブリックの改善を重ねていきます」と話す。

目標と指導と評価の一体化は道半ばだが、成果を感じている面もある。「2年生が12月に行う探究学習の発表会では、自分の考えや活動内容を生き生きと話す生徒が年々増えています。普段の授業で、『探究する力』や『継続する力』などを生徒が意識して学んできた成果であり、ルーブリックがあったからこそ得られたものだと感じています」(三浦先生)

「6つの資質・能力を日々の授業で育んできたことが結果的に、23年度大学入試における総合型選抜や学校推薦型選抜での国公立大学合格者数の増加につながったと考えています」(横田先生)

向井佳子校長は、今後の目指す方向性を次のように語る。  
「本校の生徒の進路は多様ですが、どのような道に進むにしても、自分で自分の人生を切り拓き、充実したものにできる力を育むことが教育目標です。そして先生方がこれから、『自分で考え、自分の意見を持ち、自分の言葉で表現する』生徒の育成のために積極的に挑戦できる環境を提供していきたいと考えています」

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任